令和4年度　練馬区立大泉学園緑小学校　学校評価

学校教育目標	○よく考える子ども　○心豊かな子ども　○最後までやりぬく子ども　○健康で明るい子ども
［めざす学校像］	○学ぶことを喜びと感じながら、主体的に将来への夢や希望をもって学べる学校　○子供一人一人が大切にされ、地域の一員であることに喜びと誇りがもてる学校
［めざす児童像］	○授業が楽しいと感じ、学力が定着し、考える力を高める児童　○豊かな心をもち、優しく明るく一人一人を大切にできる児童　○粘り強く取り組み、社会の役に立ち、信頼と尊敬が得られる児童　○健康の大切さを知り、すすんで運動や体力作りに取り組む児童
［めざす教職員像］	○授業改善に取り組み、授業力向上等の自己研鑽に励む教職員　○法を遵守し、人権意識をもち、互いを尊重しながら切磋琢磨できる教職員　○学校・地域を愛し、自分の仕事への自信、誇り、謙虚さがもてる教職員

項目	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価項目	総評	自己評価結果	自己評価を踏まえた次年度の改善策	学校関係者評価	改善策・今後に向けて
確かな学力の育成	学習指導と読書指導・学校図書館の充実を通して、確かな学力を育成する。	学習指導の充実による授業規律、学習習慣、基礎的・基本的な内容の定着	・スタンダードに基づく授業規律（話す聞く態度・姿勢、発言の仕方、正しい言葉遣い）、家庭での学習習慣（学年×10分）、学習スタイルの定着。 ・デジタル教科書、MEXCBT、東京ベーシックドリル等を活用した繰り返し学習の充実。 ・授業の「めあて、流れ、まとめ」の表示と振り返りの時間の確保（全授業80%） ・積極的なICT機器活用（視覚化）、動作化、作業化の取り入れ（全授業60%）	教員「学習規律の定着指導」「繰り返い指導」「授業のUD化」「ICT活用」の実施率 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 教員、児童、保護者「家庭学習の定着」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 児童・保護者意識「分かる」「習熟度分かりやすい」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 単元の目標通過率 4:80%　3:70%　2:60%　1:50%↓ 全国学力・学習状況調査結果 4:120%　3:100%　2:80%　1:60%↓	3.6	・学習スタンダードを基に、学習規律が定着するよう指導にあたっていると感じている教員は、96%である。 ・家庭学習の定着を目指している教員は95%、家庭で毎日勉強している児童は70%、「宿題等で家庭学習が定着している」と感じる保護者73%であった。教員は継続的に宿題を出し、児童の家庭学習を促しているものの主体的に家庭学習に取り組んでいる児童の数値が改善されていないことを課題として挙げている。 ・「授業のめあてを明確にしている」教員96%、「繰り返し学習」の実施率83%、「ICT機器等による視覚化」96%と、多くの教員がICT機器を積極的に使用し、視覚的な授業を展開することができている。 ・「授業が分かりやすい」と回答した児童93%、保護者95%と授業の分かりやすさに関しての割合は高い。一方、「習熟度別算数の授業が分かりやすい」の肯定的な回答では児童80%、保護者96%であり、保護者は効果を感じているものの、児童との開きが16%ある。 ・今年度の学力調査は全国平均を全て上回ったが、全国の傾向と同様、応用的な学習についての正答率は低い。	・今後も学期始め等に教員間で共通理解を図り、児童の実態に合わせながら、学習規律、学習習慣開等の スタンダード化を図ります。 ・導入時にも、前時の振り返りを行い、児童が本時の活動に明確な目的意識をもって活動に取り組めるように働きかけていく。 ・ICT教材の利用や家庭学習の進め方等を紹介する等の題材や意欲付けを工夫し、宿題以外の家庭学習も啓発をすることで児童がますんで家庭学習に取り組めるよう促す。また、宿題についても同量同質を求めるのではなく、家庭学習と併用する形として学習習慣を付けるツールとして扱う。 ・習熟度別学習については、教員の指導方法の違いにも影響される場合もあるので、コースによって指導方法の差が埋まるよう学習スタンダードの学習展開を基本に担当者間で児童の学習状況についての情報交換しながら連携を取る。	●目指す児童像に「授業が楽しい」とあるが、児童がなにをもって楽しいと感じるかは様々で難しい。例えば、ロープを結ぶという方法を教えても、興味を示さない。しかし、どのような時にロープの結び方が活用できるのかを具体的に教えていくと興味を示してくる。授業も同様で、児童が何に興味を示すかは様々で難しいが、児童が興味を示すような授業を工夫し、授業改善を図っていってほしい。 ●学力テストでは国語の「話す・聞く」の正答率が低い。また、児童アンケートでは、「相談できている」という評価が低い。家庭学習で「〇〇を家族に話してみよう」という課題を出してもらえると、家族で話すきっかけとなるし、親も忙しいので、課題にしないと取り組まない。家庭の中で話すことが「話す・聞く」力を高める手立てになると考える。 ●学力テスト等の問題に慣れていない児童もいるという実態が気がかりである。類似問題を学習した教科もあると聞いている。テストに慣れさせていくことも必要であると感じる。 ●書きぞめの文字が整っていたり、先生方の板書が丁寧であったりと、文字に対する教育も大切にされていることがうかがえ、ありがたい。	●児童の実態（多様性）に合わせながら、大泉学園緑小スタンダードの見直しと共有化、実践化を図り、授業規律の定着をめざす。 ●家庭学習においては、宿題以外の家庭学習の啓発を進めたり、個別最適な課題を家庭と連携して設定したりする等、学習習慣の定着に向けて取り組む。 ●大泉学園緑小スタンダードをもとに、児童が分かりやすい授業（授業のユニバーサルデザイン化）を推進し、個別最適な学びが構築できるように授業改善等を図る。 ●ネット教材等を計画的・効果的に活用した補充的な学習や繰り返し学習への取組を推進する。 ●学力調査により明らかになっている課題に類似した問題をMEXCBTを活用して回答する経験を増やす等、課題を解決できる授業づくりに取り組む。
		学習指導の充実による思考力・判断力・表現力、自ら学ぶ意欲や主体的な学び方、情報活用能力の育成	・「体験的な活動」、「問題解決学習」、「考える場」、「意見を交換する場」の設定（全授業の70%） ・文房具・思考ツールとしてのICT機器活用（毎日の利活用） ・プログラミング教育の実施（10時間程度） ・持続可能な開発目標（SDGs）と関連付けた教育活動の取組 ・外国語における話す・聞く・読む・書くの基礎的技能の習得。 ・「障害者理解」、「日本人としての自覚と誇り」を重点とした学校レガシー教育の推進 ・校内研究の計画的な実施と充実	教員「主体的、対話的で深い学びに向けた授業改善」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 児童意識「考えを発表し、話し合う」「めあて達成への努力」 保護者意識「自ら考え判断して課題を解決」 4:85%　3:75%　2:65%　1:65%↓	3.5	・「考える場」の設定等、70%の目標、「外国語活動」、「計画的な校内研究」、「ICTの毎日の利活用」の実践については90%以上の教員が実施していると回答しており、ICT機器の活用は教員の中でかなり浸透してきた。「プログラミング教育」については、題材等が1月以降に計画されていることもあり、82%の実施率に留まった。プログラミング教育については学期末までに実施する。 ・「すすんで考え、発表している」と回答した児童59%で昨年度より10%以上低下しており、積極的に考えを発表しようとする児童は少ない。 ・校内研究では、「主体的・対話的に学ぶ児童の育成」をテーマとし、ICT機器（タブレット端末）の活用と国語科や言語活動を校内研究の内容を関連させ、児童が主体的、対話的に学習できるよう授業改善を図っている。 ・「めあて達成のために努力している」児童83%、「自ら考え判断して課題を解決していく力を付ける教育活動できている」と捉えている保護者83%の回答であった。	・引き続き、発表する・発言する・表現する経験を積ませ、児童が「間違っても良い」、「発言ができなくとも書くことで自分の考えをもち伝えられた」という感覚がもてるよう一人一人の考えを認め、評価していく。 ・引き続き、タブレット端末の活用、話型の習得、振り返りの実施等の授業改善を通して児童の主体的で対話的な学習への参加を促す。	●低学年でもタブレットを活用して、文字を書いたり、写真を撮って絵を描いたりする姿に頼もしさを感じた。 ●電子黒板を活用することは、有用だだが、文字が小さかったり、光が反射したりしてみにくい場面もある。ICT活用による健康問題にも意識を高くもち、指導を進めてほしい。 ●授業を参観していると、上の空の様子の児童もいる。「どうして面白くないのか」、「どうして自分の考えが発言できないのか」と考察し、授業改善を推進してほしい。 ●　評価から、コミュニケーション力に課題があると見て取れる。マスクを外して表情を見ながら話すことで安心感を与えられるのではないか。 ●皆の前で話すことへのハードルは高く、「ええ？」という驚きでも、否定的なニュアンスで言われたと偏つく児童もいる。間違っても構わないという姿勢で児童に接し、最初は、とにかくたくさん意見を出していくことが、力になると考える。	●タブレット端末を活用して表現することで、自分の考えをもち、発言・発表する機会を設定する等、児童の主体的で対話的な学びへの授業改善と児童の言語活動の充実を図る。 ●「障害者理解」、「日本人としての自覚と誇り」を重点とした学校レガシーや持続可能な開発目標（SDGs）と関連付けた教育活動を通して、学び方や考え方を身に付けるための体験的・探究的な学習を積極的に取り入れる。 ●年間指導計画に基づき、情報活用能力育成やプログラミング教育の発達段階に応じた系統的な指導の実践化に努める。 ●ICT機器を活用することを前提として校内研究を推進し、計画的な研究授業の実施、日常的な教材研究と授業改善に努める。
		読書指導・学校図書館の充実による本をすすんで読む子の育成	・授業における学校図書館管理員や学校図書館の積極的活用 ・朝読書、読み聞かせ、親子読書、読書量の目標等の設定 ・おすすめの本を紹介し合う、読書の感想を交流し合う場の設定 ・寄贈本の受け入れ等を中心とした蔵書充実 ・持ち運びブラック等の導入による学級文庫の充実	教員「具体的方策」の実施率 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 児童・保護者意識「本を読んでいる」 4:80%　3:70%　2:60%　1:60%	3.4	・教員のアンケートでは、「学校図書館等の活用」97%、「読書指導の推進」96%という回答である。身近に本に ふれられるよう学級文庫として区立図書館や学校図書館から学級への貸し出しにも取り組んでいる。 ・「すすんで本を読んでいる」という児童73%、「学校が読書の習慣作りに努めている」と捉えている保護者76%となり、児童の肯定感は昨年度とほぼ変わらないが、保護者の学校の取組についての理解は概ね理解されているという結果となった。	・引き続き、朝読書の時間を実施できるよう工夫を図る。 ・引き続き、学級文庫を学年で定期的に入れ替えたり、保健室用の図書を開架したり、一人一冊、家庭より本を持参させたりして、より多くの本に触れさせる環境をつくる。 ・引き続き、読書旬間の取組の中に、教員の読み聞かせを入れる等の工夫をし、児童により一層、本の楽しさが伝わるようにする。	●読書より楽しいこと、興味をひくことが社会にあふれている現状があるので、読書の大切さについて家庭へ啓発することも必要である。 ●毎年、話題となるが、かつては学校で教科書を音読することが多く、本にふれ合うことができた。音読の時間を多くとるようにしてほどうか。	●本に接する機会を与えるため、読書旬間、図書館管理員や地域ボランティアを活用した読み聞かせ、授業における音読発表会等の活動を継続する。 ●家庭との連携し、読書目標の設定、親子読書活動等の取組を検討・実施する。
豊かな心の育成	人権教育・道徳教育の推進、いじめを許さない学校づくりと生活指導・特別支援教育の充実、自尊感情、自己肯定感を高める特別活動を通して、豊かな心を育てる。	互いを尊重する人権教育・道徳教育の推進によりいじめを許さない学校づくりと思いやりの心の育成	・いじめや人権に関する特設授業の実施（年3回） ・いじめアンケート調査等による防止と早期発見の取組の実施。 ・いじめ一掃プロジェクトへの参加。 ・道徳性に係る成長の様子の継続的把握 ・年間指導計画に基づく道徳科授業、人権教育の実施。 ・価値について自分事として考える道徳、価値について多面的・多角的に議論する道徳への改善と道徳授業地区公開講座の実施。	教員「具体的方策」の実施率 児童・保護者意識「学校が楽しい」「思いやりがある」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ いじめ認知件数 4:10%　3:20%　2:20%↑　1:30%↑	3.7	・教員アンケートは、「いじめや人権に特化した授業（年3回）」、「いじめの防止・早期発見の取組」の実施率100%、。「道徳教育に関する成長の様子の把握」99%、「考える道徳への授業改善」97%の意識であった。 ・「学校が楽しい」と回答している児童88%、「落ち着いた楽しい学校」だと回答している保護者90%「他人に優しく接している」と回答している児童94%。「豊かな人間関係を育む教育活動が行われていると回答している保護者91%となった。 ・いじめアンケートで回答された内容を全ていじめとして認知することで、アンケートごとに100件程度の案件が生じしており、全体の20%程度となる。アンケートを基に児童に丁寧な聞き取りと指導を進めていくところである。	・学校いじめ防止基本方針に則り、継続していじめ防止対策に取り組む。 ・日々クラスの時間（朝の会など）で、クラスの良さや大切にしたいことなどを価値付ける一言指導を積み重ねる。 ・報告や指導の記録を作成し、早期対応後（事後）の指導に役立てる。また、記録を生かし、解決後も引き続きの指導や経過観察等の必要な対応を丁寧に実施する。 ・引き続き、教員からの児童の呼称は「～さん」に統一する。 ・道徳授業地区公開講座の参加率を高める工夫を検討する。	●いじめ認知の捉え方が適正であるのか、また、いじめ発生に対する評価対象が先生だけにならなければいけない風潮に疑問を感じる。いじめについては、学校だけの問題、教育現場だけの問題ではないと考える。 ●「学校は楽しいですか」の回答に12%が否定的に答えている。要因は様々であろうが、方策を講じ、否定的意見の解消を図っていてほしい。	●全体計画・年間指導計画を活用し、意図的・計画的な人権教育・道徳教育を推進し、年3回の「ふれあい月間」に合わせた「いじめ防止の授業実践」を継続する。 ●道徳の学びのポートフォリオ、多面的・多角的に考えるための話合いやICT機器の活用等を通して、児童が自分事として捉えることができる道徳の授業改善を推進する。 ●道徳授業地区公開講座を計画し、道徳教育への理解を深める取組を実施する。 ●学校いじめ防止基本方針に則り、いじめの防止・早期発見・早期解決への組織的な取組、校内研修、支援方法の検討会議等に継続して取り組む。
		生活指導・教育相談活動・特別支援教育の充実による規範意識の向上	・スタンダードに基づく指導による規範意識の向上 ・規範意識を高めることをねらいとした授業の実施（年1回以上） ・SOSの出し方教育の実施（年1回以上） ・情報交換及び、児童への働きかけ等の対応協議を目的とした校内委員会等の定期的・継続的開催。（50回以上） ・地域、外部機関、スクールカウンセラー、心のふれあい相談員等の活用・連携。	教員「規範意識の向上指導」の実施率 教員意識「組織的な生活指導推進」 児童・保護者意識「きまりを守る」 児童「相談できる」 保護者「相談体制の充実」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 30日以上の欠席 4:5名　3:7名　2:10名　1:10名↑	3.6	・教員アンケートでは、「スタンダードによる指導」、「規範意識を高める授業の実施」とも95%以上の達成率であった。「きまりを守って生活している」との回答は、児童93%、保護者94%であった。 ・「組織的な生活指導の推進している」と捉えている教員98%、「相談できている」児童59%、「相談の機会が充実している」と捉えている保護者83%という回答となり、学校・保護者と児童の満足度に大きな差がある。また、児童の肯定的の回答は昨年度より10%程度低くなっており、困ったことがないという回答も18%あった。 ⑧-2　様々な要因から登校をしぶる児童が増えている。	・スタンダード（生活編）をもとにした指導を定期的に実施する機会を設けたり、発達段階に応じて規範意識を高める授業を実施したりすることを継続する。個人差について は、各学級で必要に応じて声掛けを し、個人差を小さくしていく。 ・学級での目標、週の生活目標を振り返る機会を設ける。 ・通信等の発行により、繰り返しきまりなど確認をする。 ・ふれあい相談員に教室や新一年生保護者会等で自己紹介をしてもらう等、ふれあい相談員やスクールカウンセラーが教育相談の意義等について説明する機会を設けたり、相談室の開室時間を校内に掲示したり教育相談が身近に感じられる工夫することで、教育相談への正しい理解を広める。 ・スクールカウンセラーやふれあい相談員を交えた校内委員会の開催の可能性を検討する。 ・アンケートやチェックリストを活用し、継続的に児童の困り感を把握したり、相談者を指名して相談ができる機会を検討したりする。	●ランドセルの重さの問題は、社会問題として考え、解消していく必要があると感じている。 ●自分のものは自分で運ぶというのがモラルであり、重いから置き勉というのは、私は違うと思う。 ●不登校問題については、感染症の流行なのか、人間関係の問題なのか、個性的な特質なのか、背景を特定することは難しく、心配している。学校では、スクールカウンセリ ングや臨床心理士も関わって相談等をしていると聞いているが、学校や友達とコミュニケーションがとれなくなってしまうことが辛いことではないか。解決に向かうことを願っている。	●宿題や家庭学習で使わない教科書等は、重さに配慮して学校に置いておくことを認めているが、最近は、ナイロンのランドセル等、軽いランドセルも製品化されているようである。 ●道徳科、学級活動等を中心に規範意識を高める授業等の取組の計画と実践化を図る。 ●児童に対する温かい見守りと、一人一人を大切にする姿勢を不登校等予防の基本方針とする。学校サポートチームの活用、教育相談体制の充実を図り、不適応児童や登校しぶり児童の早期発見と解消に向けた取組を行う。スクールカウンセラーやふれあい相談員とも協力し、学校全体で対応するとともに、必要に応じて練馬区スクールソーシャルワーカーや、子ども家庭支援センターとの連携を図る。
		キャリア教育の充実による充実感や自尊感情・自己肯定感の高揚	・キャリアパスポートの活用した学校生活における目標の明確化と振り返り（年5回程度） ・教科・領域における異学年交流の実施 ・望ましい集団活動による各自の役割の意識化指導の充実 ・保護者をゲストティーチャーとした職業体験授業の実施 ・大泉学園中学校、近隣幼稚園、保育園との交流活動の実施	教員「具体的方策」の実施率 児童意識「よいところがある」 4:85%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 児童・保護者意識「責任をもって取り組む」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓	3.4	・教員アンケートでは、キャリアパスポートを定期的に活用し、学校生活や学校行事の目標を立てたり、振り返ったりすることができていると感じており、キャリアパスポート活用率は94%となった。 ・時期を変更せざる得ない活動もあったが、予定していた異学年交流を進め、教員アンケートでは異学年交流の成果への高評価は100%となった。一方で「自分によいところがある」という児童の自己肯定感に関する肯定的な回答は、71%と昨年度比10%以上低下している。 ・幼保小中の連携は100%の実施率であるが、教員の達成感は92%であった。小中一貫教育推進の有用性を肯定的に捉えている保護者の回答は54%であり、30%が有用性が分からないと回答している。 ・計画のにおいじの会、障害者理解教育、農家などのゲストティーチャーによる授業を実施したことからキャリア教育実施への教員の満足度は88%であったのに対し、「責任をもって取り組めた」という児童87%、「行事で成長を促している」という保護者93%という回答であり、学校行事への保護者の期待の高さがうかがわれる。	・発達段階に応じてキャリアパスポートに成長の記録を蓄積し、振り返る時間をもつことができるよう、キャリアパスポートによる指導に継続して取り組む。 ・学級活動（係活動・当番活動・お楽しみ会など）、学校行事、委員会活動、授業における様々な取り組みと、年間を通して振り返り活動の機会を多く設ける。どんな取り組みがどのように良かったか具体的な声かけや、表記に対するコメントなどで伝えていくことで、自己肯定感を高める。 ・幼保小中の連携については、当該学年だけでなく、全学年の児童に活動について担任から説明をしたり、全校朝会での講話や当該学年からの紹介をしたりと児童に印象付ける発信を試みる。 ・ホームページ記事だけでなく、学校だより等の紙面でも幼保小中連携の活動のついての記事を掲載し、家庭へ有用性を伝えていく。	●展覧会の作品も展示方法も工夫されていて、大変よかった。先生方には、〇年生では、これを作らないといけないという伝統に縛られるのではなく、創造性豊かな新しいテーマの作品が作れるよう計画を立てていってほしい。	●自分の学びを中・長期的に振り返り、将来への展望や見通しをもたせる教材としてキャリア・パスポートを活用することを継続する。 ●小中一貫教育においては、小中一貫教育取組プログラムを活用し、「目指すべき15歳の姿」の実現を図る取組を実施するとともに、共通の児童生徒の課題等をテーマに夏季合同研修会を行う。 ●近隣の幼稚園・保育園と連携した交流学習、スタートカリキュラムに基づく入学当初の活動を通して、楽しい学校生活が送れるよう配慮していく。
健康の保持増進・体力の向上	体力向上の取組、食育・健康教育、安全教育の充実を通して、健康の保持増進・体力の向上を図る。	体力向上を図る取組の充実による意欲的に運動に取り組む態度の育成	・体育科指導の工夫（運動量が確保できる授業展開） ・外遊びの推奨、なわとび旬間、持久走旬間の実施 ・新体力テスト結果に基づく課題改善に向けた授業等の実施（授業改善プランへの反映）	教員「具体的方策」の実施立 児童・保護者意識「体力を高める努力」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 体力調査結果 4:120%　3:100%　2:80%　1:60%↓	3.6	・「取組を計画的に実施している」教員97%、「すすんで運動し、体力を高める努力をしている」児童84%、保護者は82%であり、教員と保護者・児童の満足度に10%以上の開きがあった。 ・年度後半に外遊びを全校一斉に実施するよう緩和した。持久走・なわとび旬間も実施し、運動機会を増加させた。 ・体力調査総合得点は、全国平均値に対して に81%に留まっている。個別の種目においても、全国平均値を下回っているものが、各学年各男女で96種目中64種目（67%）であった。	・外遊びの推奨、持久走旬間、なわとび旬間に継続して取り組み、日常的に運動する機会を設ける。 ・体力調査の結果を基に本校児童に足りない力を高める補助運動を毎回の体育の授業における準備運動等に位置付け、継続して取り組む。体育科の指導計画を見直し、補助運動を取り入れた指導計画を作成・実施する。	●体力テストの結果からは、感染症流行前の体力にもどってきていないと感じる。特に、瞬発力系の種目の能力が低い。校庭の砂（環境）、グリップ力（体力）、測定方法等、それぞれに相関がありそうである。 ●外遊びよりも楽しいこと、興味をひくことが社会にあふれている現状がある。外遊びの必要性について、家庭へ啓発していくことも必要である。	●令和4年度の新体力テストの結果を活用し、児童の体力の状況を把握して、課題に類似した補助運動を取り入れる等、実態に合わせて体育授業の改善を図る。 ●引き続き、体育集会や持久走旬間、なわとび旬間を行い、休み時間も含めて日常的に運動に親しませる機会を設ける。
		健康教育・食育の充実による心と体の健康への関心の高揚と実践力の育成	・「早寝・早起き・朝ごはん」の推奨（学校・保健・給食だより）と、生活アンケートによる振り返り。 ・薬物乱用防止教室、学校保健委員会の充実。 ・感染症予防対策を実施した ウえでの教育活動の充実 ・指導計画に基づく食に関する授業や体験的な活動の実施。	教員「具体的方策」の実施率 児童・保護者意識「早寝早起き朝ごはん」「ですんであいさつ」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓	3.4	・健康教育・食育について「取組が計画的に実施されている」という教員の回答は88%、保護者の回答は86%であった。一方、「早寝早起きや朝ごはん」を実践していると回答した児童は80%と教員・保護者より5%以上開きがある。 ・あいさつについては、「できている」と回答した児童が83%、「学校があいさつや返事をする等の基本的生活習慣が身に付くよう指導している」と回答した保護者が89%であり、児童の肯定的評価は昨年度より、8%低くなっている。	・各学級交代制の「あいさつ運動」、保健委員会による発表集会等を計画する等、児童生徒で生活向上のための活動に取り組む機会を設ける。 ・生活指導目標やチェックリスト等を活用し、継続して生活習慣を振り返る指導の機会を設ける。 ・諸通信、諸掲示、学校保健員会の継続的開催により、健康教育について家庭への啓発を図る。	●他校では、あいさつ運動で大きな声が出ている。 ●今の子供たちは「知らない人には、声を掛けられても答えない」と教育されているので、路上での挨拶に無反応なのは仕方ないと思っている。しかし、名札を下げて学校を訪れたときは、すすんで挨拶してほしい。校長先生からも全校朝会のとき等に、今日はお客さんが来るから挨拶するようにと事前指導すると、いいのではないか。 ●「朝の旗振り」当番からは、「挨拶ができるようになっているよ」という声をもらっている。継続して取り組んでいくことが大切であると捉えている。	●挨拶については、学校生活向上のため児童主体の活動に取り組む場を設けたり、全校朝会の校長講話で取り上げたりすることによって、あいさつ運動を推進する。 ●家庭との連携しつつ、「早寝、早起き、朝ごはん」の習慣づけの推奨と振り返りを通して、望ましい生活習慣の定着を図る健康教育を推進する。 ●全体計画、年間計画に基づいた計画的な食に関する指導を展開するとともに、地域の農業者と連携し、伝統的な日本の食文化に触れる食育を推進する。
		安全指導の充実による危険を回避しようとする力の育成	・現実に即した避難訓練、Jアラート対応指導、交通安全教室、セーフティ教室の実施。 ・安全指導日の一斉指導、各教科及び領域に関連させた安全学習の実施 ・新「防災ノート」「災害と安全」の活用【年2回以上】 ・施設・遊具の安全点検（毎月）の実施 ・情報モラル教育（学習用タブレットの適正な利用を含む）の実施及びSNS家庭ルール作成・遵守への啓発	教員「具体的方策」の実施率 児童・保護者意識「身を守る力」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓ 校内事故発生比率、前年度比 4:100%　3:110%　2:120%　1:120%↑	3.7	・安全教育の「取組を計画的に実施した」という教員の回答は98%、「危険なことから身を守る力が付いている」という児童の回答は児童88%、保護者95%であり、教員・保護者より児童の肯定的評価が10%程度低い。不審者対応訓練では、警察署からの講師を招き、教員研修を公開することで父母会から学校の取組として紹介していただけた。 ・病院入付く程度の怪我は32件であった。 ・情報モラル教育の「取組を計画的に実施した」という教員の回答は89%であった。SNSノート、道徳教材を活用するにとで児童の情報モラルの向上を図っているところである。	・引き続き、現実に即した避難訓練となるよう計画を適宜、見直し、様々な形態での避難訓練を実施するとともに教職員への研修機会を設ける。 ・地区班編成の必要性について 様々な角度から検討する。 ・学校安全計画に基づき、夏休みなどの長期休業中の防災ノートの活用、一声指導の実施等、計画的な取組を推進する。 ・デジタルシチズンシップの視点から東京SNSノート、学校SNSルール、情報モラル教室等を活用したり、一声指導を取り入れたりしながら、情報に関する規範を高める。	●まちでの乗り方を見ると、自転車安全教室は、一緒に考える機会が必要なので、保護者にも参加してもらった方がよい。低学年から自転車に乗っている様子を見かけるので、自転車安全教室は、低学年やってもよいのではないか。大人にも必要性を感じている。町内でもやっていきたい。 ●校庭開放でも、けがは、少なくなったと感じる。一方で、外で遊ばなくなったとも感じる。 ●情報モラルの問題については、家庭への啓発の必要であると考える。	●情報モラルの向上をねらった授業を全学年で計画的に実施するほか、4年生以上は、専門家による指導を年間1回以上行う。
学校・家庭・地域の協力・連携	地域の人々や自然・文化・学校や地域の歴史と関わる活動の充実、教育活動の発信と適正な学校評価を通して、学校・家庭・地域の協力・連携を深める。	学校・地域の人々・自然と関わる活動の充実を通し愛校心、郷土愛等、社会貢献に資する意欲と態度の育成	・地域に生きる人々が講話する機会の設定（年1回以上） ・地域人材、保護者、外部団体、教育関係機関等による学習指導及び、学校行事等の実施。（学校支援コーディネーターと連携） ・地域社会へのボランティア活動の開発と実施 ・複数学年での地域未来塾の実施と充実 ・地域行事への参加・協力	教員「具体的方策」の実施率 児童意識「地域の役に立ちたい」 保護者意識「自然・地域との関わりを大切にした教育」 4:90%　3:80%　2:70%　1:70%↓	3.6	・「取組を計画的に実施した」という教員の回答は93%であった。SDGsに関連した総合的な学習やボッチャ体験、ドローン体験、たくわん漬け体験等、外部講師や地域人材活用を進めてきた。 ・「地域の役に立ちたい」と回答している児童は、91%、「自然・地域との関わりを大切にした教育が行われている」と回答した保護者は86%であった。	・これまでのゲストティーチャーとの関わりを引き継ぎつつ、自然や地域の方々と関わる活動、キャリア教育に関わる活動、学校支援コーディネーターと連携した地域人材を活用した活動に取り組む。 ・たくわん漬け体験を継続し、農家と連携した学習活動の充実を図る。たくわん漬けの大根については第二校庭での成長具合によって市販品の活用も検討する。	●「おやじの会」は、次年度から感染症流行前の活動にもどしていきたいと考えている。	●各学年に外部講師を招き、日本の伝統・文化に触れさせる機会を発達段階と、教科のねらいに即して位置付け、学んだことを発信する機会を設ける。 ●学校支援コーディネーター等と連携した学校の教育活動おける地域人材の開発・活用の継続化を図り、児童の地域貢献意識、豊かな体験学習、学力の定着（地域未来塾））を充実させる。 ●地域の特色を生かし、農業者と連携した学習活動を実施する。 ●学校公開等の参観、学校だより等の紙媒体、学校ホームページ等のデータ媒体などを通して教育活動の様子等の発信を充実・発展させる。 ●学期末等の保護者・児童によるアンケートのほかに、学校公開や学校行事ごとに学校関係者や保護者・児童による学校評価を行い、学校教育の充実・改善に努める。
		学校公開による教育活動の発信と適正な学校評価を通した学校教育への理解の深化	・学校公開による教育活動の発信 ・学校・学年・学級だより、ホームページ、メールシステム等による学校生活の様子等の情報発信と啓発 ・ICT機器を活用した家庭との連絡の拡充。 ・学校の教育活動の評価アンケート及び、学校評議委員会（年3回）の実施 ・学校経営計画、学校評価の公開	活動発信回数 4:100回　3:80回　2:60回　1:60回↓ 保護者意識「様子が分かる」「小中一貫教育を推進している」 4:85%　3:70%　2:60%　1:60%↓	3.8	・ほぼ毎日、ホームページで活動の様子を発信し、1月19日現在278回の発信である。給食記事も毎日153回の発信をした。 「教育活動を十分に公開している」という保護者の回答は88%。昨年度より若干数値が下がり、発信の工夫が必要と感じる結果であった。	・引き続き、授業や行事の公開やメール、ホームページ掲載等の通信手段を積極的に活用し、迅速かつ有効に情報が発信できるよう努める。 ・学級連絡網については個人情報保護の観点から廃止の検討をする。		